

# 生存科学研究 二五二一

VOL. 9 NO. 2 1994. 3. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-3563-3518

## 文明・文化研究会

2月8日(火)午後2時より、基本構想委員会の柱となる3つの小委員会の一つ「文明・文化研究会(仮称)」の第1回会合が開催された。

出席者は、八千代国際大学学長高瀬浄(生存研理事)、國學院大学教授小林達雄、元最高裁判事香川保一、日立製作所研究所小泉英明、卜部文麿(生存研常務理事)の諸氏(順不同)と生存研側担当者等。

まず生存研小平専務理事より、基本構想委員会とこの研究会の関係、これらの目的や構成等について説明があった後、高瀬氏が、提出した自らの資料「近代知の陥穽を考えるーポスト冷戦の歴史的転換点ー」を参照しながら、以下のような話題を提供した。

判断には基本的な筋書きを考えておく必要がある。今自分は、「和魂洋才」とはなにかを考えている。和とはなにか。その中の残すべきものはなにか。洋とはなにか。その中から学び取れなかったものはなにか。日本は成熟社会にはいつている。成熟社会は退屈な灰色のものであるはずだが、日本はそれを考えていない。現代は、世界史的スケールの歴史転換期にある。かかる状況への対応は、単に政治面や経済面に限定されず、人間の基本的な生き方、文化のあり方などにも深く関わっ

てくる。今の科学は人間だけが突出しているが、それには限界がある。それは経済学だけでなく、科学すべてに言える。そうなったのは近代科学に問題があるからではないのか。今の科学を支配しているのは機械論的自然観(要素還元主義)である。それは構造を見落としている。地球史や人類史、社会史の中に現代という時代状況を正しく位置付け、自然と人間が共存できる新たな文明的な転換期を見定めていくことが必要である。

次いで小林氏が、自らの研究経験から、縄文文化について以下の話題を提供した。

縄文時代は1万年も続いている。その後現代までが高々2000年であるということと比較して、その重みを考えてみなくてはならない。縄文時代の細部に渡る研究も大切だが、その全体を貫く生き方、それを自分は「縄文姿勢方針」と呼ぶが、その探究が大切であろう。嘗ては縄文文化は停滞であると考えていたが、決してそうとは言えない。縄文人は、土器を持ち、自然の過酷な変化に対応しながら、限られた食物の中から色々なものを食べ、自然とのバランスを保って生きてきた。複雑な現代を見る鏡として縄文時代を考えることが必要であろう。

その後の討議では、植物の品種改良は、植物の立場から見れば決して改良ではあり得ない、人間本位のものであること。デカルトも分析の次には総合が必要であるといっている

が、それがその後分析だけが進歩したために誤解を受けていること。現代人は自然に近づきたいという気持ちが無意識の中にも持っていること。縄文時代が最も永く続いた日本人のあり方が、21世紀の世界に貢献できるのではないかということ、等が議論された。

### 第11回東西の健康観・医・薬研究会 医療と S k e p t i c s

1月14日(金)午後2時より標記のタイトルで、朝日新聞「メディカル朝日」編集部久保田裕氏と東洋医学技術教育振興財団矢澤一博氏より報告があった。

久保田氏は「現代医学の呪術性」と題し、アメリカにおける1978年の“psychop”設立の歴史から、超常現象に対する“skeptics”の考え方と世界の状況を紹介した。

この領域は一般に「非科学—科学」モデルでとらえられるが、医療分野では「非科学—人間(社会)—科学」という人間のファクターを含んだモデルが必要になってくる。

というのは、人間は本来非科学的な生物であり、「科学的にこれが正しいのだ」とねじ込んでいってもあまり意味がない。一般人を対象としたアンケートでは、「非科学」を信じない人は3割に過ぎない。また医療従事者でも不思議現象や超常現象を「体験」したと答える人も多い。そこから医療は「科学」になるべきことが正しいかという疑問が生じる。

こうした医療の「非科学性」は日本のみならず世界中でみられる。0リング、外気功、ホリスティック医学、プラセボ効果など、「非科学」的医学には枚挙にいとまがない。それがそれなりの「有用性」を持っているらしいこともまた事実である。

超心理学(para psychology)に対するskepticsの立場は厳格であり、一般の医学にみられるものより厳格ともいえる。この眼から見ると非科学的医学のみならず西洋医学と

いえどもその有用性が立証されていないものも数多いとされた。

ついで矢澤氏は「内側から見た東洋医学」と題し、まず、現代医療の中での鍼灸師のもつべき知識と鍼灸の業界としてのあり方を論じた。

鍼灸の領域の現在の課題としては、東洋医学の現在の課題としては、構成概念・語句の整理をした上でのソフトな生体反応を評価するシステムが必要とされている。現在までに科学的に解明されている作用機序は、生体における高位のものと低位のものに整理される。

「疑似科学的」研究と荒唐無稽な仮説の看破が重要であり、特にそれがメディアにのった時には注意すべきである。さらに東洋医学に関する情報の質と量を確保しなければならない。例えば「反科学」論が「生まじめに」取り上げられたり、「気」について日中間のとらえ方に違いが見られたり、情報が入ってきた時のボタンのかけ違いが見られる。

要は、玉石の批判的区別が重要であるとされた。

討論は、医療における奇跡、医療における“人間性”の要求、超心理学の社会性の欠如、異能者、ジャーナリズムの倫理などについてなされた。

### 第3回 医薬問題研究会 MRI-QOL Index について

1月21日(金)午後3時より、標記のテーマで研究会が開催され、(株)三菱総合研究所経済・経営本部首席研究員、今岡達雄氏が発表した。

三菱総研では、米国のランド研究所が国家政策の優先度分析のために社会的受容性評価手法の研究から導いたQOLファクターと、イギリスのチャールズ・モリスが価値の基本的次元の組み合わせを土台にして作った価値観等を研究したが、それらは機能的に導かれた

ものであり、人々の生活の質を計量するためのインデックスは演繹的に導かれたものがより望ましいので、モリスの基本的次元の組み合わせを増やして検討し、13の価値観からなる「MRI-QOL Index」を作った。

しかし、これでは基本的で普遍的であるため、日常生活の面に限定した場合、分析が複雑になってしまう。そこで、これを基に、日常生活を営む上で必要不可欠な生理的欲求、物(金)的欲求、時間的欲求ならびに情動的欲求を19の日常生活上のニーズとしてまとめた、「生活評価インデックス」を作成した。

以上の説明の後、この評価法と、これも三菱総研が開発したDEMATEQ法(新製品の需要予測手法)とを組み合わせさせた新製品の需要予測の実例等を紹介し、その有用性を示した。

発表の後、紹介された評価法のインデックスや適用法、医薬品開発や需要調査との関連での評価のあり方等につき活発な討議が行われた。

#### 会員研究会「生死と生存」第9回 植物と人間の行為

2月26日(土)午後2時より、標記研究会が開催され、生存科学研究所常務理事ト部文磨委員が、話題として取り上げたブーゲンビリアやハイビスカスの品種改良の跡を示す各段階の花や葉を展示して、以下のような発表を行った。

この勉強会の「生死」は「いのち」のことを意味している。そこでこの勉強会はまず植物からスタートした。これまで、植物の地球環境上の問題や生態学との関係で、マクロの視点からの話があったが、今回はミクロの視点から身近な問題を取り上げて見たい。

熱帯植物栽培の経験から、植物の中には種(たね)も実もないものがあまりにも多いのに驚いた。多くは挿し木によるがこれはクローンである。人手をかけて挿し木を行わなけ

れば種(しゅ)は絶滅する。人間の行った品種改良の結果そのような事態になった。種の保存の立場からは一大事である。それほどなくても、品種改良を行った植物は一般に環境変化などに弱いものが多い。品種改良は人間の都合からのことである。植物自身から見れば改悪であろう。

地面に落ちたどんぐりや銀杏の自然発芽は1/100くらいであろう、それに対してシャーレでの発芽は100%である。しかしそれでは自然淘汰がかからない。

品種改良された植物食品の栄養的価値ははたしてどうなのであろうかという疑問がもたれる。このように今、人間は自然と対立し、共存していない。日本の昔の文化を見直すべきである。

これに対して草野洋一氏が、「いま『農業生態学』を人間の生態系と言う考え方から研究している。もともと農業は自然に手を加えることから出発している。人口の増加は食糧生産の増大によって支えられてきた。自然に手を加えないわけにはいかない。手を加えることの結果を考えてバランスを取ることが大切である。」とコメントした。

討議では、個の倫理・感性と群の倫理・理性と、そのインターフェイスについての議論他、食品の栄養、管理、需要と流通、住民の趣向等が議論され、最後にト部委員が、このような問題を日常生活の中で考えることを啓蒙していきたいと結んだ。

#### 自治医科大学の地域医療と ジョイセフのインテグレーション・ プログラム活動

1月20日(木)生存研では、自治医科大学地域医療学教室、奥野正孝講師(生存研評議員)とジョイセフ(家族計画国際協力財団)今康男理事、高橋秀行氏、本間由紀夫氏を招き、自治医科大学の地域医療への取り組みと、ジョイセフが中国、東南アジア、アフ

リカ等、世界各国で展開しているインテグレーション・プログラムの活動状況を聞き、自治医科大学、ジョイセフ、生存研の3者が、地域医療、保健活動にどのように協力できるかを検討した。

自治医科大学では、地域医療学教室を設け、大学内に地域家庭診療センターを作り、そこで地域住民の診療を行いながら地域医療のあり方を研究するとともに、研修医・学生に僻地での医療の実習もしている。全国各地の僻地診療所へ卒業生を派遣し、そこでの診療を支援する体制も組んでおり、地元の医師会とも協力しており、地域によっては診療所の統合をおこない医師会病院のような機能集積にも取り組んでいる。国外で地域医療に取り組んでいる卒業生も増えている。

ジョイセフでは、寄生虫予防を出発点に家族の健康教育を行い、それにより住民の自発性による家族計画の成功を導いている。事業を展開している国や地元民からは高い評価を得ているが、成果の科学的・客観的評価が困難で、そのため、プログラムへ資金を提供している国際機関の評価が必ずしも高くはないのが悩みのひとつであり、その評価法の開発を望んでいる。国内的には、国際的活動に先んじてすでに完成したプログラムを持っているが、その後の日本の経済発展、社会の変化に対応した新たな戦略の開発が望まれる。

こうした状況で、3者が協力することによって新しい戦略開発の可能性が期待できる。

## 常務理事会

1月11日(火)午後3時より、研究所会議室において常務理事会が開催され、来年度事業計画の準備にむけて協議がなされた。

会議では、前回の常務理事会で報告された各項目についてその対策を協議したほか、生存科学研究所とハーバード大学武見講座との関係について、初期からの経過を追っての説明が行われた。

武見講座は、武見先生が日本医師会会長在任中に、日本医師会が主催した世界医師会の「医療資源の開発と配分」フォローアップ委員会に出席した、当時ハーバード大学公衆衛生大学院学部長ハイアット教授の申し入れて話が始まったものである。

日本医師会会長を退任された武見先生は、始めにこれを、当時創設され生存科学研究所の前身となった生存科学研究会や生存科学研究基金には入れないで、別個の個人の仕事として取り組まれていたが、武見先生のご病状が悪化した際、武見家からその仕事を引き受けて継続してほしいとの依頼があり、当時の諸事情からとりあえず引き受けることになったものである。

その後、基金が資金吸収の税法上の必要から財団として別に創設した生存科学研究所において、長期にわたるその取扱に関する議論を経て、ハーバード大学公衆衛生大学院との武見講座に関する合意書が取り交わされた。

第1回武見フェローの問題はその時までの前段階においてすでに決定されていたものである。

このようにして始まった武見講座であるが、ハーバード大学の武見講座運営・教育方針が生存科学研究所が本来の目的としている「武見思想の深化・実現」とはかなり乖離しており、5年近い間、双方で真剣な討議を重ねたが、両者間の意見の相違が明らかとなり、ニュース前号でも紹介したようにハーバード大学側からの申し入れにより、合意書に定める手続きによって今回の終焉に至った。

## 研究所日報

- 1月24日(月) 別府市総合調査研究委員会
- 1月29日(土) バイオサナトロジー学会  
「霊肉二元と心身一元」
- 2月 1日(火) 別府市総合調査研究委員会  
～ 3日(木) 別府訪問調査
- 2月17日(木) 専務理事別府市長訪問
- 2月24日(木) 常務理事多田富雄教授訪問